

伊予灘でのギムノディニウム赤潮について

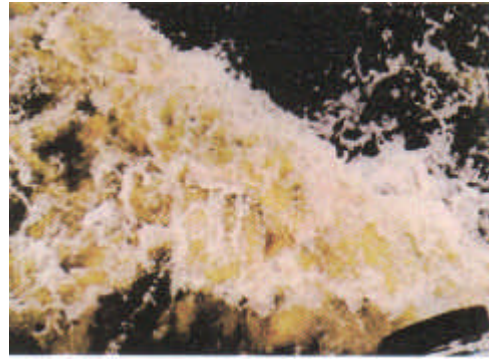
企画開発室 菊池隆展

はじめに

昨年そして今年度(平成9年度)と過去に漁業被害をもたらしたギムノディニウム赤潮が伊予灘で出現した。1985年に発生した際には、天然アワビ・サザエ等に1500万円(西部瀬戸内海全体で10.2億円)の被害を出した種類である。

当场では開設以来継続して赤潮の研究を行っているが、突如として発生する赤潮はいまだに解明されていないことが非常に多い。そのため赤潮対策の最重要ポイントとして、赤潮の出現をいち早く発見することがあげられる。

これまでのデータから推量される伊予灘での本種赤潮の出現についてここでは述べてみることにする。



1985年に西部瀬戸内海で発生したギムノディニウム赤潮(水産庁資料)

考 察

1. 本種赤潮の出現は梅雨明け以降(7月上旬～8月上旬)で、水温が20℃以上。
2. 出現前には台風の接近等によって時化、その後晴天が継続している。
3. 他県海域での赤潮による着色の確認が伊予灘より3日以上はよい。
4. これまで観測された流れの大きさから推定するに、発生海域からの移動には3日程度を要する。
5. 出現濃度は岸近くより、幾分沖合いの方が濃く、漁から帰港する際に確認されることが多い。
6. 一度岸近くに到達すると岸にそって東西に分布域が拡大し、この際には初期確認時の濃度より低くなっている。
7. 高濃度でない場合、船の航跡の目視・透明度板などのような白色板を海中に投入するか、海水の採水によって確認しやすくなる。
8. 本種プランクトン自体は黄褐色であるが、高濃度になると海水が茶褐色になる
注意: 本種は水中を上下運動可能であるので、上層の着色が見られなくなった後にも存在していることがある。
9. 初期出現海域は、伊予灘でも流れが小さい海域である。
10. 岸近くで確認された着色は、それ以前に沖にあった可能性が高い。



1996年の赤潮: 着色が確認される2日前に同一海域で調査した時点では、本種プランクトンは存在していなかった。後に、発生時期に水温上昇を伴った東向きの流れが発生していたことを確認した。

1997年の赤潮: 他県での赤潮情報を考慮してやや沖合を航行調査した結果、着色が確認され、翌日岸近くに到達していた。

おわりに

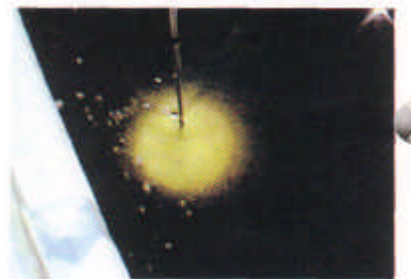
今年度、本種と違う種類の赤潮が近県海域で確認されており、海水に褐色系の着色が見られるようです。また、赤潮の出現は、海水の着色によって確認されることが多いことから、日頃から海水の色には十分注意してください。

なお、今後も当场では漁業被害防止のための調査・研究を継続していきますので、関係機関、関係者には引き続きご協力の程よろしく願います。

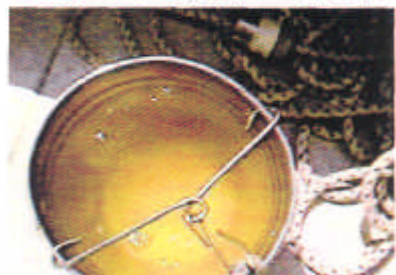
参考文献

水産庁瀬戸内漁業調整事務所

昭和61年夏季西部瀬戸内海 ギムノディニウム赤潮の発生状況と被害の概要



透明度板による観測例(1997年伊予灘)



着色海域で採水した例(1997年伊予灘)

